

カナメモチ

宮内 泰之

(人間社会学部人間環境学科)

Photinia glabra

MIYAUCHI Yasuyuki

1. はじめに

カナメモチ (*Photinia glabra*) はバラ科に属する常緑小高木である。本州の東海地方以西から四国、九州に自生するほか、中国南部や東南アジアにも分布している。山地の斜面に多く、乾燥した尾根筋や沿海地にも生育する。漢字では‘要籜’と書き、名前の由来はモチノキに似ていて、材が扇の要に使われたから、という説がある。しかし、『牧野新日本植物図鑑』には「材で扇のカナメを作るからであるというが、これは誤りで恐らくアカメの転訛と思われる」と、『原色日本植物図鑑』にも「新葉が赤色なのでアカメモチという。アカメモチからカナメモチという」とある。また、『広辞苑』には「古来扇の骨としたことによる命名ともいい、車軸・鎌の柄などにもする」とあるほか、『世界有用植物事典』にも「材は紅褐色、重硬(気乾比重0.98)で、器具の柄などに用いられる」とあり、いずれも‘扇の要’に利用したとは書かれていない。扇の要にはかつてはクジラのひげが利用されていたことから考えると、その素材としては硬さよりも柔軟性の方が重要であるように思われる。したがって、扇とは無縁ではなさそうであるが、牧野が指摘したようにカナメモチの名の由来は別名のアカメモチの転訛であると考えた方が無理がないようだ。

2. カナメモチの花と葉

カナメモチの古名をソバノキという。小さな白い花が散房状に咲く様子

をソバの花に見立ててのことだが、実際にカナメモチの花を見たことがある方はどれほどいるだろうか。今日、カナメモチやその園芸品種は生垣として多用されている。粗放管理のもとにある生垣では初夏に花が咲いている様子がしばしば見られるが、その花を見て「カナメモチも花が咲くのか」と驚かれる方も少なくない。一般の住宅では単木ではなく生垣として植栽されるものがほとんどであり、定期的に刈り込まれている生垣では花を見ることはあまり期待できないので、花をつけない木という先入観を持っている方が多いのであろう。私自身、学生時代までカナメモチは植栽木であるという先入観を持っていた。西日本で初めて植物調査をした際に、樹林内に自生する見覚えはあるが種名はわからない常緑樹の葉を採取した。その晩宿で先輩からそれがカナメモチの葉であること、鋸歯がまさに鋸の刃のように鋭くて硬いことが特徴であること、西日本の山地に自生していることを教えてもらった。当時の私は赤い新葉が付いているカナメモチしか認識できていなかったのである。その葉の鋸歯を手の甲に当てて挽いてみると本当に傷がつき、文字通り体に刻みこんで覚えたものである。

花よりも赤い新葉に目を奪われてしまうのは、古来も同様のようである。枕草子第40段‘花の木ならぬは…’には、「たそばの木、しななき心地すれど、花の木どもちりはてて、おしなべてみどりになりたるなかに、時もわかず、こきもみちのつやめきて、思ひもかけぬ青葉の中よりさし出でたる、めづらし。」とある。古名のソバノキには、カナメモチの他にブナ、ニシキギなどが想定されているが、この冒頭の‘たそばの木’については、後に続く描写(木々の花が散ってしまっ、いずれもみどりの葉が茂る状態となっている中に、季節外れに、濃くて艶やかな紅葉が、思いがけず青葉の中から差し出されているのは、新鮮である)から、カナメモチで間違いのないと思われる。今日と同様に、花木としてではなく赤い新葉が目ざされていたようである。そして、‘花の木ならぬは…’の冒頭に持ってこられているということは、清少納言の見ていたカナメモチは定期的に刈り込まれていたのかもしれない。そうでなければ、青葉の時期に咲くカナメモチの散房花序に気付いたはずである。

3. 新葉はなぜ赤いのか

それでは、カナメモチの新葉はなぜ赤いのだろうか。カナメモチに限らずクスノキ、モッコク、アカメガシワなど、新葉が赤くなる現象は分類群や常緑・落葉の別を問わず多く見られる。これは新葉にアントシアニンの色素が生成、蓄積されるためと説明できる。それではアントシアニンの蓄積はそれら植物にとってどのような意味があるのであろうか。これまでの有力な説はいずれも弱く傷つきやすい新葉を外的要因から守ることを前提として、‘殺菌作用’、‘紫外線からの保護、または光阻害(光によって光合成系が障害を受けること)の予防’、そして‘食害する生物から隠ぺいする’等で説明されてきた。しかし、いずれも科学的な確証が得られていない。Dominy(2002)は緑化遅延つまり新葉が赤くなる現象を、熱帯雨林に生育する樹木の林冠の葉と林内の葉を比較することによって、上記3つの説について論証している。それによると、一つ目の殺菌作用説については、葉表面のクチクラ層が重要な役割を果たしており、アントシアニンの最も重要な光学特性を歪曲しているとして退けている。二つ目の紫外線予防説に対しては、紫外線が最も強く降り注いでいるはずの林冠の葉よりも林内の葉の方が赤くなる傾向にあるというデータを提示している。また、アントシアニンが蓄積するのは表皮直下の細胞で光合成系の組織とは離れていることから、紫外線からの保護や光阻害にはあまり役立っていないと説明している。そして、三番目の隠ぺい説については、草食性の無脊椎動物の多くは青色はよく見えるが赤色に対する知覚は欠如しており、また、草食生物に対してアントシアニンに満たされた赤い葉は枯れていると認識されるとして、最も妥当な説であると述べている。しかし、草食生物の多様性や密度との関係などについて、まだ明らかになっていない点も指摘している。

新葉が赤くない樹木も多いが、それらの新葉が紫外線により障害を受けているかという点必ずしもそのようには見受けられない。一方、多くの樹木は刺や毛などの形態、毒や刺激性の成分により、葉を動物の食害から回避する機能を獲得している。カナメモチの新葉にはそれら形態や成分が見られないことから、上記の隠ぺい説は有力なものに感じられる。

4. カナメモチの園芸品種

これまで述べてきたようにカナメモチの新葉は確かに赤いのであるが、やがて通常の緑色の成葉へと変化し、梅雨が明ける頃にはすっかり緑葉の茂った普通の常緑樹となる。しかし、街の生垣を見ていると、非常に鮮やかな赤色をしたものや、いつまでも赤い葉が目立っているものがある。現在、これらの多くはレッド・ロビンと呼ばれる園芸品種である。

カナメモチの園芸品種はあまり多くないが、*P. × fraseri*とされるものが数品種流通している。その母種はカナメモチ (*P. glabra*) とオオカナメモチ (*P. serratifolia*)で、1940年代、アメリカのアラバマ州で最初に作出された。オオカナメモチは岡山県や愛媛県、奄美諸島や西表島など、日本にも局所的に自生しているが、分布の中心は中国中南部である。*P. × fraseri*のうち最も有名なのがニュージーランドで作出された‘レッド・ロビン’[‘Red Robin’]である。新芽の色が濃く、葉がより大きく、生育旺盛で生垣に多用されている。カナメモチとは、葉柄に鋸歯の痕が見られるのがカナメモチ、見られないのがレッド・ロビンという点で区別できる。

かつて国内では‘ベニカナメ’と呼ばれるものが流行った。ベニカナメはカナメモチの新葉のより赤いものを選抜したもので、独立した品種というほどのものではない。しかし、ごま色斑点病などの影響で枝枯れするものが多く、1970年代頃以降、性質の強健なレッド・ロビンが生垣の主流となっていく。

5. 粗放管理のすすめ

近年、このレッド・ロビンにもごま色斑点病が多発し、立ち枯れている様子がよく見られる。ごま色斑点病は糸状菌によるもので、その初期症状は展開したばかりの新葉に濃褐色の数mmの斑点ができるものである。やがて病斑は枯れ、褐灰色になり、2、3年激しく発生を繰り返した後、株全体が枯れてしまう。病葉、病落葉をていねいに集めて焼却処分し、窒素系肥料を施すなどの処置が必要である。薬剤散布を進められる場合もあるが、ここでは植栽環境と管理方法を改めて考えてみたい。

そもそも、樹木は健全に生育している状態であればそう簡単に病虫に侵さ

れて枯れてしまうことはない。つまり、病虫害が多発する樹木は健全に生育できておらず、その原因の多くは生育環境、地下部や日照状態、風通しなどにある。特に地下部、土壌の状態は見落としがちである。植え付けてしまってから改善することは難しいので、植える際により深く掘りこんで周りの土壌を軟らかくすると共に、排水状態にも気を配る必要がある。そしてもう一点は刈り込みの頻度と程度である。生きている枝葉を切り落とすということは、その木に多大なストレスを与えるということであり、樹勢を衰えさせることになる。生垣の場合には定期的に刈り込まなくてはならないのは言うまでもないが、過度の刈り込みは避けたいものである。ほどほどに手を抜いた刈り込みをしてやると、運が良ければカナメモチの花を見ることができるかもしれない。

参考文献

- Dominy, N. J., Lucas, P. W., Ramsden, L. W. Riba-Hernandez, P., Stoner, K. E. & Turner, I. M. Why are young leaves red? Oikos. 98:163-176. 2002.
- 堀田満ほか編. 世界有用植物事典. 平凡社. 1989.
- 池田亀鑑校訂. 枕草子. 岩波書店. 1962.
- 北村四郎・村田源. 原色日本植物図鑑. 木本編Ⅱ. 保育社. 1979.
- 牧野富太郎. 牧野新日本植物図鑑. 北隆館. 1961.
- 佐竹義輔ほか. 日本の野生植物. 木本Ⅰ. 平凡社. 1989.



レッドロビン(花)



レッドロビン(生垣)